

# スタンダード研究会会報

(2004) No. 14

2004.05.29

## 目 次

研究会発表要旨	
・ 「ポーリーヌへの手紙について」(岩本 和子)	… 1
・ 「二百余年後のレ・ゼシエル」(河野 英二)	… 3
・ 「修道院におけるルネサンス」(山本 明美)	… 4
・ 「スタンダードとスペイン」(井出 勉)	… 6
・ 「スタンダードとヴォルネー」(南 玲子)	… 8
クロック報告	… 11
セミナー報告	… 16
会員活動報告	… 18
会員名簿	… 21
後記	… 23

## 【研究発表要旨】

第 37 回 (2003. 05. 30 於 獨協大学)

### ポーリーヌへの手紙について

岩本和子

スタンダールことアンリ・ベールが故郷の妹ポーリーヌに書いた手紙を主な資料とし、作家の思想や文学の形成過程を辿るとともに、従来言及の少ないポーリーヌ・ベール像を浮き彫りにする試みを行ってきた。本研究会における同テーマでの前回発表(1997年4月7日)に続いて、研究の後半部、特に最終部で参照した手紙を紹介し、考察する。

1815年11月1日付の手紙以降、兄妹の文通は途絶えてしまう。この手紙も妹に荷物の郵送を依頼するだけの短くそっけないものであった。直接の行き来や同居生活は断続的ながら軍人時代よりも増えていくので、そのために遠い地では「理想化された対話者」であった妹は次第に幻滅の対象となり、兄は冷淡になっていったとも考えられる。

やがてポーリーヌは夫を亡くし、相続をめぐる親族との争いに疲れ、また定住地も失ってしまい、「厄介者」にさえなっていくのである。しかし、これまで考えられてきたよりも実際には兄妹の関係は強いものであり続けたはずだということを前提に、二人の生活を追っていく。

1824年にポーリーヌは新たにバシール＝ロングヴィル夫人と親しくなり、共にイタリア旅行に出発することになる。この時、アンリは二人に宛てて手紙を書いている。「イタリアへ赴く軽薄な頭への助言」と題する長いもので、辛口の批判も交えつつ軽快な調子で綴られ、妹やその友人への関心の強さも窺えるものとなっている。また1825年3月21-22日付の現存する最後の手紙は、妹に対する衝撃的とも言える冷淡さが露骨に現れたものと看做されてきたものである。確かに妹に労働を勧める文面は、いよいよその財源が底をついてきた妹の悲惨な状態を物語ると同時に、兄の叱責的な調子が印象的である。しかし同じ手紙の中での、送金方法に関する気遣いは本物であり、厳しい口調はむしろ妹への関心がまだ消えていないことの証とも取れる。つまり兄は失望しつつも心配をしているのである。さらに、ポーリーヌは没落したと言っても旅をし、兄を通じてではあるがスカラ座にボックス席を借りたりパリの社交界に出入りをしているのであるから、当時の女性としてはかなり自由奔放であったとも考えられるのである。

やがて兄の口利きで、パリ郊外の温泉での「辛い労働」に就き、まもなく会

社倒産で失業する。その頃の 1830 年にアンリはやっとイタリア領事の定職に就き、以後妹へ年 700 フランの仕送りを続けることになる。デル・リット氏が紹介した 2 枚のポーリーヌの肖像画デッサンは、それぞれドラクロワとその従妹の娘アルベルト・ド・リュバンプレの手になる。1 枚目は 1835 年頃描かれたとされ上流階級の貴婦人風、2 枚目は「愚鈍で、ずんぐりとし、醜い」と評され、ポーリーヌの生活・健康状態の悪化が原因として 1840 年頃の作とされる。しかし、後者の時期においてさえ少なくともド・リュバンプレ夫人やパリの芸術家たちとポーリーヌは交流があったわけで、「パリの安アパートの中二階で」惨めに暮らしていたという通説にも疑問の余地がある。

1835 年にポーリーヌから従兄のロマン・コロンの宛てた手紙が残っており、グルノーブルにいる末の妹ゼナイドが同居の提案をしたのに対し、感謝と断わりが綴られている。礼を尽くそうとしながらも妹夫妻の世話になることの精神的苦痛が窺われる貴重な資料である。1842 年のアンリ死亡に際しては、コロンのポーリーヌに通知をし、慰めの言葉をかけている。「財産のすべてをポーリーヌ・ベールに譲る」という最後の遺書に従い、家具売却や BN への手稿売却、出版社からの支払いなどからできた「財産」が、150 フランずつ年 4 回送金されることになる。それが尽きた 1852 年以降は、コロンを中心にアンリの友人たち 6 人が 100 フランずつ出し合い、年 600 フランの金銭的援助を続け、ポーリーヌの亡くなる 1857 年まで途切れることはない。作家スタンダールの生涯の、少なくとも前半は「ミューズ」であった妹への、ささやかな報いではないか。ポーリーヌの最後を看取ったのはゼナイドであり、故郷のペリエ館 4 階、祖父も父も亡くなったその同じ部屋であった。夫妻との同居生活に遠慮や確執はあったようで、夫妻の世話も心からの同情か、世間体のためであったのかはわからない。

結局、文通の途絶えた 1815 年以降も、従来考えられてきた以上には兄妹は深くつながっていたのであろう。ポーリーヌは確かに、例えばバルザックの妹ほどの知性や文才には恵まれず、作家としての兄への献身は形としては残されなかった。ほとんど一方的に兄が書いた膨大な書簡を読むと、兄の身勝手さが印象に残るばかりである。しかし、これらの「テキスト」はアンリの思索と人間観察と文体練成の強烈な足跡であり、それを通して妹を相手に夢を紡いだことは確かである。ポーリーヌもそれに答えようとし、素質の片鱗を見せながらも、時代の軛から飛び出せなかったのである。夫よりも女友達との交際を好み、旅をし、パリに暮らしたことはせめてもの自我の解放であったのではないか。

## 二百余年後のレ・ゼシェル

河野 英二

2001 年春からのパリ第三大学における一年間の在外研修の折、機会を得て 10 月初旬にレ・ゼシェルを訪れました。スタンダールが幼少期を振り返り、「天国での滞在」(『アンリ・ブリュラルの生涯』)と記したサヴォワ地方の小さな高原の町です。同地方の中心都市シャンベリーの駅前から長距離バスに乗り、約 40 分程で着いたその町は、メイン・ストリートを 10 分も歩けば端から端まで通り抜けられるほどの小さな町でした。その通りの東南端、隣町との境になっているギエ川の橋の近くに、教会と向かい合う形で、幼少のスタンダール＝アンリ・ベールが二百年余り前に「完全な幸福」(同書)を味わった、叔父ロマン・ガニヨンの妻の実家、旧カミーユ・ポンセ邸がありました。橋のたもとから、かつてスタンダールが «digue» (堤防)と記したものであろう小道を通過して裏側にまわると、ビブリオフィル版の写真にあったのと殆ど変わらぬ姿が目の前に現れました。南側の窓のすぐ手前は十数台の自動車が雑然と並ぶ駐車場となっていましたし、ギエ川との間には低い塀で囲まれた集荷場のような施設が川の眺めを遮っていましたが、でも、午前中の町の静寂の中、ギエ川のせせらぎの「神聖な音」(同書)が、確かに今も、快く聞こえてきました。

たっぷり 2、3 時間程かけて、町の中や旧ポンセ邸の周囲を歩き回ったり、日本と同じような今日風の幼児向け遊具の置いてあるのが何故か微笑ましかった、旧ポンセ邸近くの小公園やギエ川の川べりに佇んだりした後で、町から出て、まさに秋晴れのもと、田園風景の中をギエ川の上流目指して歩いていってみました。途中、なだらかな丘陵の斜面に放牧されている多数の大きな牛たちに驚かされたり、青空を切り取っているかのような少し遠方に見えるサヴォワの奇怪な山塊に感嘆したりしながら歩き続けていると、2、3km は遡ったであろう上流の小橋の辺りに出ました。殆ど原生林に近いような密集した草木の中で快い音を立てて流れるギエ川は、おそらく二百余年前に少年アンリが目にしたのと同様の姿を保っているように思われました。

帰りは、おそらく 1、2 時間に一本は来るであろうと聞かされていたバスが、どういうわけか、3 時間余り待っても現れず、夕暮れとともに急に冷え込んできた高原の大気の中で、孤絶した世界に一人取り残されたような心細い思いもしましたが、優しく声をかけてくれた町の人たちにも励まされ、夜の闇の中にようやく現れたバスに、たった一人の乗客として乗り込みました。途中、例の

«Grotte» (洞窟)の傍を通る時、やはり、少年アンリがグルノーブルから遠く離れて味わった「天国」をそのまますっかり味わうことは到底出来なかったけれど、少なくともレ・ゼシェルという町は、二百年余り後の自分にも彼の「幸福」の一端を示してはくれたなと改めて感じながら、シャンベリーへと向かう急な山道を駆け下りていくバスに、心地よく身を委ねていました。

第38回 (2003. 12. 26 於 京大会館)

## 修道院におけるルネサンス

- イタリア古文書とスタンダールの創作 -

山本明美

スタンダールは中世、ルネサンス、宗教改革をどのように捉えているのであろうか。この作家はミシュレとともに「ルネサンスの概念形成に与った」人として歴史家ルシアン・フェーブルに見出されている。だがミシュレが当時のフランスで支配的だったスコラ哲学にたいする蔑視と軌を一にしてこの哲学が「ルネサンスを遅らせた」と考察するのに対し、スタンダールは、中世の時代に東方との接触の結果伝えられたスコラ哲学による教育が、16世紀に偉大な人々を多数輩出させるのに重要な役割を果たしたことを『イタリア絵画史』で指摘している。

一方、イタリア古文書 179 には、11世紀から16世紀まで良識的な隠遁所として機能していた修道院が、トレント会議以後旧教側からの反改革によって修道女らに「永遠の監禁状態」を押し付けられると極端な変化を被ったことが述べられている。スタンダールが古文書中に注視したのはこうした事実である。

彼の翻案(『深情けは殺す』『尼僧スコラスティカ』)の跡を辿るにあたり、本発表は特にその固有名詞の用法を検証した。つまり、「リパラータ(Riparata = 保護された)」のように同一の名を修道院と修道院長、言わば器と内容に充当することを「換喩的同化」と呼ぶことにすると、『尼僧スコラスティカ』のヒロインが聖女スコラスティカに処女を誓い、プティート(Petito)修道院のイン・パーチェ(in pace = 地下納骨所)に自発的に戻ってしまう時、

彼女の行動は「換喩的同化」と同定される。スコラスティカとは、古文書179における聖アルカンジェロ修道院が属していた宗派の創始者ベネディクトの実妹で6世紀に実存した聖女の名に由来していよう。古文書ではヒロインのモデルとなった修道女は修道院から追放刑が課されるのに対し、スタンダールの翻案では修道女らの監禁状態がベネディクトの戒律によって微細に規定されているとされることから、創作上のピロティにしたことが推察される。

但し、スコラスティカの名はスタンダール自身が「バロック的な名」であると序文で断っている以上、その理由を別に追求する必要がある。目を引くのは、彼の翻案でイン・パーチェが修道院の地下にではなく、教育施設を意味する「ストゥーディ（Studi = Organizzazione scolastica）」の地下に設定されていることである。これにより、12世紀に創始されたスコラ哲学創始者アベラールの弟子で、この作家が情熱恋愛の引き合いにだすエロイズとの関連に気付かされる。二人の書簡にはベネディクトの戒律の解釈をめぐって、修道院の根本精神が問われている。実際『深情けは殺す』のプランでは、「12世紀」の良識的な隠遁所とサヴォナローラ以後予測されたトレント会議が対照的化されている。『尼僧スコラスティカ』のヒロインにも、中世の隠遁所と反改革以後の修道院を比較する独白があり、作者が皮肉を込めている。以上から、スタンダールの翻案は、ルネサンスが早や12世紀のスコラ哲学に芽生えながらも、旧教側の反改革以後、修道院において抑圧される歴史を想起させる作品として構想されていることに思い至る。

-----

スタンダール研究会における以上の発表は、2003年6月27~28日トゥールで開催されたコロックでの発表原稿を基盤にしている。

## スタンダールとスペイン

井出 勉

スタンダールとスペインとの関係は、スタンダール関係の多岐にわたる研究の中でも、決して十分に研究され尽くしているとは言えない。せいぜい大祖母エリザベットから受け継いだ《エスパニョリズム》、『ル・シッド』や『ドン・キホーテ』の読書、さらにはサン・レアルの影響などが目につく程度である<sup>1)</sup>。もちろん昨年出版された『スタンダール辞典』でも、スペインに関するメリメの影響を指摘するのを忘れてはいないが、《辞典》という性質上、わずか2ページほどの「ESPAGNE, ESPAGNOLS, ESPAGNOLISME」という項目のみである<sup>2)</sup>。しかしながら 1821 年から始まったメリメとの親交、1804 年に三幕もののオペラ『ドン・カルロス』を計画したこと、1829 年に行った《謎のスペイン旅行》、その後加筆し 1830 年 5 月に発表された『箱と幽霊 スペイン奇談』や、同年 6 月の『ほれぐすり シルヴィア・マラペルタのイタリア文にならいて』などは、スタンダールとスペインとの関わりが無視できないことを示している。さらにはこの時期が 19 世紀の他の作家たちと同様に 1830 年という重要な節目の年へと収斂していくことを見逃してはならない。また、スペインが「小説家スタンダール」にとって幼年期からの《幻想》を育んできた地であることは、とりわけ『アンリ・ブリュラルの生涯』を繙けば明らかである。だが、「ル・シッドのように美しい」という大祖母エリザベットの言葉に集約される幼年期以来のスペイン《幻想》には目が向けられても、1830 年以降、小説家として成熟していくスタンダールにとって、作品の中でスペインが単なる《幻想》の地以上になっていく過程は、研究者の目を逃れているように思われる。このことは、19 世紀前半にスペインがどのようにフランス人に受容されていたかを理解した上で、スタンダールとスペインとの関係を見直したとき明らかになってくるように思われる。今回の発表では、スタンダール最晩年の未完の作品『ラミエル』（1839-1842 年執筆）とメリメの『カルメン』（1845 年）の作品比較、自然児（もしくは野生児）ラミエルとジプシー娘カルメンの人物比較を中心課題にして論を進めた。

スタンダールが直接ジプシーである人物を描くことはない。しかし、ジプシーについての 19 世紀前半のフランス人のイメージを理解した上で、メリメが描くカルメン像に目をやると、スタンダールが描くラミエル像と多くの点で類似していることに驚かされる。

ジプシーを意味する語を『十九世紀ラールス大辞典』で探すと、gitane, tzigane, egyptien, bohémien が該当する。カルメンが携わる「エジプト稼業」なる表現も



ジプシー「エジプト起源説」の明らかな反映である。「スペイン統治時代に奴隷だった彼らには、いまだにエジプトの農夫のような顔つきが残っている」(『赤と黒』)や「低地エジプトの不幸な農夫に見られるように」(『1817年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』)というスタンダールの表現も、1427年にパリにジプシーが現れたことを記した『パリー市民の記録』で彼らが「低地エジプトの出身」と称していることを考え合わせるとおもしろい<sup>3)</sup>。

メリメがモンティエーホ伯爵夫人と知り合った1830年のスペイン旅行(前述したようにスタンダールはその前年の1829年9月にパリを発ち、10-11月マルセイユ滞在)とその10年後の2度目のスペイン旅行は『カルメン』という作品の成立を考える上でだけでなく、メリメのスペイン及びジプシーの知識がスタンダールの作品形成における貴重な情報源となったであろうことは容易に想像がつく。

メリメの1830年のスペイン旅行後に書かれた『スペイン便り』(すでに『グズラ』(1827年)で、「呪いの眼」と題し《邪視》を扱っている)の中の「スペインの魔法使い」では、《邪視》に言及している。同時代のバルザックなどには頻出するテーマだが、スタンダールでは『ラミエル』のサンファン医師がひきがえるのイメージとともに、《邪視》の持ち主であるということが出来る<sup>4)</sup>。ジプシーの眼の俗信に《邪視》の考えがあり(これはとりわけジプシーの女性がかつとされる)、ひきがえるもジプシーの中では《悪魔》の語と同一である。「悪魔の娘」と呼ばれるラミエル、自ら「わたしは悪魔」というカルメンは、カジモドを容易に想起させるサンファンを介して、「魔女」として処刑されるエスメラルダのイメージとともに、ラミエルがジプシー女であるかのような錯覚を与えてくれる。さらに、ラミエルが《捨て子》であることは、スタンダールの主要な登場人物の中でも、その出自の曖昧さで群を抜く。カルメンが黒い髪に黒い目でラミエルが青い眼と金髪の娘であることも、ジプシーが子どもを誘拐する噂や捨て子を育てる習慣が、セルバンテスの『ジプシー娘』のプレシオーサやユゴーの『ノートル=ダム・ド・パリ』のエスメラルダ、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』のミニヨンなどに繰り返し扱われたテーマであることを考え合わせれば、納得がいく。上述した以外にも、『ラミエル』を、スペインとの関わりや『カルメン』のジプシーのイメージで読み解く試みを支える論拠を挙げることはできるが、紙幅の関係もあり、後は紀要論文の形で発表したい。

最後に、舞踊と絵画における19世紀前半の流行について一言触れておきたい。スタンダールは『1817年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』で、ヴィガノのジプシーを描いたバレエ『ツインガリ』やセルバンテスの『ジプシー娘』に言及し、『南仏旅日記』(1838年5月24日付マルセイユの記述)ではスペイン舞踊《カチューチャ》で人気のファニー・エルスレールの名を挙げている。絵画の面で

も、1838年1月、ルイ=フィリップがルーヴル宮に「スペイン・ギャラリー」をオープンさせている。このようにスタンダールが『ラミエル』に着手した時期とは、19世紀前半の文化的な《スペインブーム》ともいべき時代の背景とともに、《幻想》と《現実》のスペインが融合して昇華され文学作品に投影された時期なのではないだろうか。

#### 註

- 1) Josue Montello, *Un maître oublié de Stendhal*, Seghers, 1970, pp.37-44.
- 2) *Dictionnaire de Stendhal*, Honoré Champion, 2003, pp.253-255.
- 3) 阿部謹也『中世を旅する人びと—ヨーロッパ庶民生活点描—』, 平凡社, 1978年, 158頁。
- 4) 井出 勉『スタンダールにおける小説技法の研究—『ラミエル』における視線の誘惑—』, 『名古屋聖霊短期大学紀要』第16号, 1996年, 89-98頁。

第39回(2003.3.23 於 京大会館)

## スタンダールとヴォルネー

南 玲子

I. デル・リットは *La Vie intellectuelle de Stendhal* において、『エジプト・シリア旅行記』(1787)、『歴史講義』(1800)、『合衆国のタブロー』(1803)というヴォルネーの三作品をスタンダールがどう受容したかを丁寧に紹介し、1802年から1822年までの時期に執筆・発表されたスタンダール作品におけるヴォルネーとの影響の画定も試みている。デル・リットが注目したヴォルネーは、スタンダールに権威的な歴史への懐疑を教え「些細な事実」への嗜好を決定付けた存在、また『イタリア絵画史』に未開人の逸話や古代美を考えるヒントを提供した存在に収斂しているようである。いずれも興味深くはあるが、彼が言及しておらず、今回あらたに提示したい側面がふたつある。ひとつは革命期と王政復古を生きた実在の人間としてのヴォルネー、他方は民族学の先駆者としてのヴォルネーである。

II. まず人間ヴォルネーから始めよう。遠征準備中のナポレオンは『エジプト・シリア旅行記』の著者に好意的だったが、帝国政策に異議を唱えるヴォルネー等イデオログは、在野の哲学者として政府にとって目障りな存在になっていった。ヴォルネーを読む前のスタンダールの日記（1805年）や後年の『ナポレオンの生涯』からは、体制に疎まれ不遇に甘んじる有能の士としてのヴォルネー像が浮かぶ。ところでヴォルネーはスタンダールにとって、歴史上の人物というほど遠い存在ではない。ふたりの邂逅の記録はないようだが、スタンダールは同時代人ヴォルネーを、自分の作品を好意的に読んでくれる理想的読者のひとりと見ていた。実際ヴォルネーの名は『イタリア絵画史』、『1817年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』、『恋愛論』の三作品の献本相手として挙げられ、『恋愛論』の完成に先立つ彼の逝去がスタンダールをおおいに嘆かせた。つまり人間としてのヴォルネーはスタンダールにとって、虐げられた大革命の逸材であると同時に、身近な思想的先達として存在感をもっていたと考えられる。

III. 続いて民族学の先駆者ヴォルネーである。1800年前後の人間研究について、たとえ理論的には未完成であれ、方法論や意識の先駆性を積極的に評価してフランス民族学の「黎明期」とみなすのが、私の立場である。ヴォルネーをそういった先駆的民族学者のひとりに数えるならば、その熱心な読者であるスタンダールの思考や創作活動にも、「黎明期」の民族学の影響が見られるのではないだろうか。

学者としてのヴォルネーは、世界の平準化のなかで消滅しつつある習俗を記録する集団としての民族学界に対する関心をスタンダールのうちに育んだと思われる。しかしさらに注目すべきは、フランス人と他のヨーロッパ人の性格の特徴を、観察者自身の目や経験に基づいて比較検討し分類するという「民族学者」的な態度や方法論を彼に教えた、観察旅行者としてのヴォルネーである。住民の「精神状態」すなわち心を知ることを至上命題とするヴォルネーの姿勢は、ベーリスム的な行動指針とも一致する。学問的な厳密さに欠けることを承知のうえで、スタンダールをたとえばイタリアの参与観察者と仮定してみよう。イタリア語の習得、現地の文献調査、政治・経済・文化についての知識、生活習慣の会得、住民との交流に基づく心理面の考察、迫害など困難の体験によって、スタンダールが、ヴォルネーら「黎明期の民族学者」の方針から大きくは逸脱していないことがわかる。

またヴォルネーは、ヨーロッパ各国民に関する実証的比較論の精神と骨組みをスタンダールへと確実に引き継いだ。もちろん19世紀以前にも各国民の性格を比較する記述は存在したが、ヴォルネーは観察と分析を旨とするイデオログのなかでも最も実践的な旅行者として一線を画している。とりわけ新大陸での体験をもとにヨーロッパ人を比較する『合衆国のタブロー』の一節は、

スタンダールの作品中に繰り返し言及されているため、スタンダールのヨーロッパ人比較研究の模範となったことは想像に難くない。ヴォルネーに献呈しそこなった『恋愛論』は、ヨーロッパ人の心の比較研究の例ともいえるだろう。

IV. スタンダールが民族学的研究者のような側面を持っていたとするならば、彼の究極の課題はいわばヨーロッパの比較幸福論にちがいない。解読すべき古文書、民族誌的な素材、歴史家的解釈、民族学者的比較研究、そして小説家のペンと、全体に流れるベーリスム。こうしたさまざまな要素が織り交ぜられてできた作品である『イタリア年代記』と『パルムの僧院』は、スタンダールの小説と比較研究、文学性と民族誌性を解明するための素材として特にふさわしいものと思われるのである。

## 【コロック報告】

Stendhal-Balzac IV : le Moyen Âge, la Renaissance, la Réforme  
Colloque international organisé par l'Association Stendhal aujourd'hui ( Tours, 27-28  
juin 2003)

山本明美

西川長夫氏は『ミラノの人スタンダール』の中で、1980年3月19日から23日に開催された「第14回国際スタンダール学会」で発表なさった折のことを「東洋人はめずらしいからであろう、私の顔にしばらくレンズが向けられてむずがゆい」と述べておられます。四半世紀近く経った昨年 Stendhal Aujourd'hui の主催したコロックに、テレビカメラこそありませんでしたが、東洋人は私だけでした。

トゥール・コロックは「スタンダール・バルザック」シリーズの4回目として「中世・ルネサンス・宗教改革」のテーマのもと、6月27日28日に開催されました。これは M.Crouzet 氏による眺望の利いた趣意書に示されているように、両作家の研究者が一堂に会し、歴史観の擦り合わせを図る野心的な企画でした。発表者は B.Didier 氏のみ欠席の36名で、各自25分の持ち時間。昼食は27日が会場の Ockeghem ホールから中世の家並みの残る路地を抜けてすぐの学生食堂、28日が会場のトゥール市役所真向かいのレストランであり、情報交換の場となりました。2日間の発表終了後、参加者は Boussard 氏ご夫妻宅の庭園での立食パーティーに招かれ、29日には Saché にあるバルザック博物館へバスで運ばれました。

私にとって何よりも幸運だったのは、M.Arrous 氏との出会いでした。氏は私が発表希望を伝えた1月下旬の時点からメールの受付け係として明敏に対応して下さいました。目下イタリア古文書179を考究中で、私の関心と一致したためでもありましょう。氏からのメールは日本を発つ前までの5ヶ月間ですら15通に上ります。大部分は日本で手に入らない文献に関するものでしたが、重厚な内容には予想を超える熱意が伝わってきました。これに他の参加者との交信、御自身の発表準備も合わせますと、氏が著名なスタンダリアンというだけではない、もの凄まじい実務の人であることが御想像頂けましょう。哲学者の雰囲気を含めた氏は1964年東京オリンピックの際、陸上フランス代表選手であったことも杉本氏から伺っています。

スタンダールの国際コロックに、東洋からおそらく今後もほぼ日本人の独走が続くことでしょう。Arrous 氏の猛烈なダッシュの甲斐もあり記録集は11月に最終校正を終えています。参加を打診して下さいました栗須公正先生に厚くお礼申

上げます。

-----  
なお Association Stendhal aujourd'hui の今後の活動は以下のようになっています。

- Journée d'étude: Courier, Stendhal et la polémique littéraire et politique sous la monarchie constitutionnelle. 15 mai 2004, Université de Paris-Sorbonne (Paris IV)  
Propositions de communication à adresser avant le 30 janvier 2004 à Michel Arrous, 3, rue C. Saint-Saëns, 78530 Buc; michelarrous@club-internet.fr

- Colloque international: Henri Beyle, un écrivain méconnu (1797-1814), Colloque international organisé par l'Université de Paris XII, Stendhal aujourd'hui et HB, Revue internationale d'études stendhaliennes, les 19 et 20 novembre 2004, à l'Université de Paris XII. Propositions de communication à adresser avant le 30 avril 2004 à Michel Crouzet, 67 rue Notre-Dame-des-Champs, 75006 Paris; Michel Arrous, 3, rue C. Saint-Saëns, 78530 Buc; ou Didier Philippot, 4, rue de Candolle, 75005 Paris.

最新の情報は Stendhal のページ <http://www.armance.com> をご覧下さい。

### **Stendhal à Cosmopolis : Stendhal et ses langues**

Colloque international du Centre d'Etudes Stendhaliennes et Romantiques (Grenoble, 4-6 décembre 2003)

粕谷 祐己

<< Son moi vit à Cosmopolis et pense en toutes les langues >> というヴァレリーの句を掲げたこのコロックは Université Stendhal の Grande Salle des Colloques を主会場として、グルノーブル大教授 Marie-Rose Corredor 氏が事実上一人で仕切ったもので、運営には困難のみえるところもあったものの全体としてなかなか楽しい学会であった。南仏を襲った大雨で交通が遮断されて足留めになった人がいたり、悪性の風邪が流行していたりして欠席者も多く、かなり予定が変更されることになったが、おかげで Michel Crouzet と Michel Guerrin 両氏の発表の司会を勤めるという荣誉が得られたのは筆者にとってはよい経験であった（さらにはクルゼ氏が発表を予定時間通りに終えるという僥倖にも遭遇した）。

本来はスタンダールがさまざまな言語を用いて自分固有の言語を創造していく様相にこの学会の興味の中心があるはずだが、二日目に *Ecrire en Stendhal, traduire Stendhal* なる *table ronde* が企画されたことでも示されるように、スタンダールを世界の諸言語文化がどのように扱ったかというところまで視野に入れようところみており、これは少々欲張りすぎだったかもしれない(くだんの *table ronde* では各発言者に10分しか与えられず、不満が残った向きも多かっただろう。まことに僭越ながら日本代表役を勤めた筆者も予定原稿はとても読み切れず、里中満智子画のマンガ版『赤と黒』を出席者に見せてお茶を濁したのだが、これが大変に受けてしまった)。ただ、筆者は全体の学問的成果に評価を下せる立場にないが、この学会はいつもよりさらに多様な出自のスタンダール研究者とその研究活動の一端を見る機会を提供してくれたのであり、それだけでも十分開催意義ありと感じられた。特に記憶に残るのはチュニジアの Fazia Skandrani 氏の発表であり、彼女がチュニジアで『恋愛論』に関する学会を企画中ということを知り、きっと行くからと約束しておいた。

作家の地元グルノーブル開催ということで一日目の *table ronde*、*Les manuscrits de Stendhal* がスタンダールの生まれた部屋で開かれたのも面白かったし(案外たくさんの方が入れるものである。もっとも市立図書館で開けば門外不出の *manuscrits* の現物を出席者に見せることができたのに、という声もあったが)、二日目のアペリティフのあった市内の *Institut culturel italien* は非常に *convivial* な雰囲気が出せる場所でよい趣向であったと思う。昼食はグルノーブル大内の食堂でとったが、金沢大学食とは料理が質量ともに段違いであることを今さらながら痛感させられた。

なお、ちょうど会期の途中で Victor Del Litto 氏が体調を崩され危篤に陥ったむね Gérald Rannaud 氏から報告があったが、その後持ち直されたのは幸いであった。

### **Stendhal et le style (「スタンダールと文体」)**

Colloque organisé par la Sorbonne Nouvelle (Paris, 19-20 mars 2004)

杉本 圭子

意外に思われるかもしれないが、このテーマでのコロックの開催は今回がはじめてということである。今回は古参のスタンダール研究者に言語哲学や文体論の専門家、ITEMの草稿研究の研究者、美術史家らが加わり(計17名)、小説、

自伝、日記、旅行記、批評など、あらゆるジャンルのスタンダード作品が俎上に載せられた。「style」とはいわゆる狭義の「文体」以外に音楽、美術の分野においては「様式」を意味し、スタンダードの関心領域すべてにかかわってくる概念だからである。

全体的な印象としては近年のスタンダード研究の傾向を反映してか、非常に包括的、総括的な議論が多かったということがある。理性的なものと感覚的なもの、崇高なものと優しいものというスタンダードの嗜好の二項対立的枠組みを前提に、「即興性 (improvisation)」（Jacques Neefs）、「言外の暗示 (réticence)」（Jean-Jacques Hamm）、「曲言法 (litote)」（Pierre-Louis Rey）、「原初的なもの (primitif)」への志向 (Jacques Dürrenmatt) といったスタンダードの文体の一側面に光をあて、文体論、記号論、生成論などの分析手法を用いて理論化をはかるタイプの発表が多く見られた。

その際、従来重ねて指摘されてきた事実の冗長な反復を避け、スタンダードの文体をめぐる新たな側面の提示、あるいは新たな分析言語による解釈を試みようという姿勢が、発表者の中にみられたことは言うまでもない。たとえばスタンダードの文章修業について、フィリップ・ベルチエ はあえて「美文家」ルソーやシャトブリヤンの果たした反面教師的役割に深入りせず、一方で厳格で雄々しいボシュエの文体とも異なる第三項として、そっけなさや甘美さをあわせもつフェヌロンの文体があったことを強調する。一方、ジョルジュ・クリーベンスティン (Georges Kliebenstein) はスタンダードが伝統的なレトリック (修辞学) に批判的であったという従来の定説を覆し、「論理的」たらしめる必要性からスタンダードが「省略」(éclipse)、「換喩」(métonymie)、「誇張法」(hyperbole) といったレトリックの手法に頼ることもあったと指摘し、レトリックを拒否したというより、むしろ「断絶」(brisure) や「即興」の法則に基づく独自のレトリックを創り出したと言うべきであると述べた。あるいはマリ・パルマンティエ (Marie Parmentier) のように、従来は「作者の介入」の技法、あるいはナラトロジーの観点から語られてきたスタンダードの小説にみられる語りの多層性 (たとえば『パルムの僧院』末尾の、発話主体の曖昧な文章にみられるような) を、バフチンの「ポリフォニー」の概念を用いて説明しようという試みも、斬新といえるほどのものではないにせよ、今回のコロックの理論重視の傾向を端的に示すものといえよう。

テーマの性質上、テキストの意味内容には深く立ち入らず、どちらかといえば現象としてのフォルムに注目するタイプの発表が目についたコロックではあったが、こうした試みがスタンダード研究のすそ野を広げたという意味では、一定の評価がなされるべきであろう。特に若手研究者たちの台頭はめざましく、会場には今までになく清新な空気が漂っていた。正直なところを言えば私自身は文体論、記号論といった分野の素養を著しく欠いているため、発表によって



はほとんど理解できないものもあったのだが（事前にある程度予想されたことではあるが）にもかかわらずあえて私見を述べれば、社会批評に近い立場をとるイヴ・アンセル（Yves Ansel）が重ねて指摘するように、「文体」とは技術上の問題だけではなく、作家の政治的、倫理的、イデオロギー的立場のすべてを包摂するものであるわけで、その意味では小説作品の細部の読解、および同時代の言説に対する作家の見解の検証を含めたより具体的、実証的なアプローチも可能だったのではないかと考えた。

なおこのテーマに関しては、今回のコロックのオーガナイザーのひとりであるエリック・ボルダス（Eric Bordas）が *Dictionnaire de Stendhal*（Honoré Champion, 2003）に寄せた、「style」の項の解説が参考になる。

## 【セミナー報告】

### Séminaire Stendhal à Paris

羽成 優

すでにご存じの通り、若手スタンダール研究者（博士課程の学生を含む）の勉強会がパリ第三大学で毎月開かれています。このゼミの発端は Doctoriales “Stendhal”（2002年5月14-15日、於グルノーブル、Centre d'études Stendhaliennes et Romantiques 主催）、その時の中心メンバー Xavier Bourdenet と François Vanoosthuyse により2003年春に組織され、同年秋より『ラミエル』にかんする発表と討論を行っています。

11/10/2003 : Serge Linkès, « *Lamiel* ou les dangers de l'inachèvement »

決定版のない『ラミエル』研究の難しさを草稿研究の立場から強調。

22/11/2003 : François Kerlouégan, « Les présentations du masculin dans *Lamiel* »

伝統的な英雄のモデルが、19世紀小説において社会からの逸脱や脆弱さを特徴とする主人公へと変貌していく過程を追いながら、『ラミエル』の男性描写がその先駆的な役割を果たしているとする。

10/01/2004 : Marie Parmentier, « Comment placer sa voix ? Les narrateurs de *Lamiel* »

『ラミエル』の各版、冒頭部分の語りを比較。1839年と1841年3月17日の原稿では語り手が不詳である一方、1840年の原稿では登場人物の一人として扱われ、第2章の終わりで物語が本当に始まると姿を消す。この語り手が登場することで物語の真実味が増し、しばしば挿入される語り手の主観は効果的な風刺の手段となっているとの考察を行う。

07/02/2004 : Marie de Gandt, « Le réel de *Lamiel* »

ギリシャ神話にみられる変身譚（アクティオン、プシュケなど）、ペローの童話、ラ・フォンテーヌの寓話等のパロディーとして『ラミエル』を読み、現実を歪曲化して描くグロテスクな幻想的作品の側面があると分析。

06/03/2004 : Alexandra Pion, « L'émancipation de *Lamiel* : de l'idéologie au roman »

スタンダールの『恋愛論』における女性解放のテーマは1804年の民法典やイデオログの結婚観、愛の観念とは大きく異なるものであり、ラミエルはクレ

マン師やサンファンの「教育」によって愛を見出すとする。

03/04/2004 : Sylvie Deboskre, « Lamiel et Sansfin : de la fusion diabolique à la libération de la disciple »

母を持たないラミエルにとってサンファンは父・教師・未来の恋人の役割を担うものとしてとらえられる。キリスト教において瘤は悪魔的なものと扱われているが、この医師の「小鳥の場面」においてラミエルは象徴的な意味で生贄にされ、男性的な知性のなかに自己のよりどころを見出すことになる。伝統的な女子教育から身を遠ざけることは、ラミエルにとって自らの感受性やエネルギーを失わずにすむことにつながると考えられる。このような意味において『ラミエル』は女子教育の伝統を覆す、女子のための教養小説であるといえる（*H.B.* no.6, 2002. にこの発表者による『ラミエル』に関する論文がある）。

-----

2003-2004 年度の予定 :

15/05/2004 : François Vanoosthuyse, « La composition du récit »

05/06/2004 : Xavier Bourdenet, « *Lamiel* ou l'histoire comme farce », 総括ならびに来年度の計画を討議。

これらの発表はいずれ論文集としてまとめられる予定です。詳細は追ってお知らせいたします。

なお補足として、この勉強会のメンバーの最近の論文掲載をお知らせしておきます。

Marie Parmentier, “Galleries de portraits, Stendhal et le portrait parlé”, in *Poétique*, no.136, nov. 2003.

【会員活動報告】2003年4月1日～2004年3月31日

会員の活動領域の多様化に鑑み、今回より活動報告の対象の幅を広げ、厳密にスタンダードに関する業績に限定せず、広くスタンダードと影響関係にある作家、および19世紀文学全般に関するものなど、周辺領域も含めることとしました。会員間の情報交換にお役立てください。

本研究会での発表要旨に関しては省略させていただきました。ご了承下さい。  
(杉本 記)

市川裕見子

- ・「スタンダードとシェイクスピア 第一部 シェイクスピアとの関わり 少年時代」『宇都宮大学国際学部研究論集』第16号 2003年10月 pp.1-14.
- ・「スタンダードとシェイクスピア 第一部 シェイクスピアとの関わり 青年時代」『宇都宮大学国際学部研究論集』第17号 2004年3月 pp.103-116.

岩本和子

- ・「アンリ・ベールとその妹ポーリーヌ(16)」『流域』52号 青山社 2003年12月 pp.27-36.

内田善孝

- ・「『アルマンズ』における賠償法」『成蹊大学 一般研究報告』第34巻 2003年10月
- ・«Un article de Stendhal dans *Le Globe*» in *L'Année stendhalienne*, numéro 2, 2003, pp.287-303.

小野 潮

- ・«L'art du parallélisme dans *Le Rouge et le Noir* ou les deux ascensions de Julien Sorel» in *L'Année stendhalienne*, numéro 1, 2002, pp.27-44. (追録)
- ・「シャトーブリヤンの見た1789年のパリ 『墓の彼方からの回想』第5巻8章(15章)」(翻訳) 『仏語仏文学研究』中央大学仏語仏文学研究会 2004年3月10日 pp.111-169.
- ・ツヴェタン・トドロフ 『バンジャマン・コンスタン：民主主義への情熱』(翻訳) 法政大学出版局 2003年12月

片岡 大右

・「シャトーブリアン、パスカルの不実な弟子 - 『キリスト教精髓』の詩学研究のための予備的考察 - 」 『仏語仏文学研究』 東京大学仏語仏文学研究会 第27号 2003年5月 pp. 57-86.

・「シャトーブリアンと音楽——恐れと哀れみの悲劇的装置」 『日本フランス語フランス文学会関東支部論集』第12号 2003年12月 pp. 87-101.

#### 下川 茂

・« A propos des «grands principes» de Fabrice Del Dongo: pourquoi le héros de *La Chartreuse de Parme* est-il réactionnaire? » dans *Stendhal, l'Italie, le voyage. Mélanges offerts à V. Del Litto*, Moncalieri (Italie), C.I.R.V.I., 2003, pp.509-519.

・« Stendhal et son penchant aristocratique : la nostalgie d'un monde à jamais révolu » dans *L'Année stendhalienne*, numéro 2, 2003, pp.211-236.

・「『パルムの僧院』の語りについての試論 - 高揚する表現のテンポ」 『立命館法学』(別冊ことばのひろがり(2) - 川上勉教授退職記念論集 - ) 2004年3月20日 pp.135-155.

#### 杉本 圭子

・「『大聖堂の高みへ』 『イタリア絵画史』の一挿話から『赤と黒』に至る青年像の変遷」 『フランス語フランス文学研究』 日本フランス語フランス文学会 2003年10月 pp.14-23.

・「ナポレオンとヴェンデッタ(復讐)の島 19世紀前半におけるコルシカの表象についての一考察」 『明治学院論叢』第712号 明治学院大学文学会 2004年3月 pp.13-40.

#### 高木 信宏

・「母性愛とヒロイズム——『赤と黒』第1部・第18章の制作——」 『ステラ』第22号 九州大学フランス語フランス文学研究会 2003年12月 pp.45-64.

#### 角津 美愛

・「スタンダール小説における incipit について」 『Les lettres francaises No.23』 上智大学フランス語フランス文学会 2003年7月 pp. 1-11.

#### 羽成 優

・«La prédilection de Stendhal pour la musique vocale dans *la Vie de Rossini*» 『慶應義塾大学フランス文学研究室紀要』第8号 2003年 pp.41-51.

#### 南 玲子

- ・「プレジダン・ド・ブロス『イタリア書簡』の読者スタンダード —理想化された作家への「結晶」—」『日本フランス語フランス文学会関東支部論集』第12号 2003年12月 pp.103-117.
- ・「観察の旅と研究者 フランス民族学の黎明期」『Résonances (レゾナンス)』第2号 東京大学大学院総合文化研究科フランス語系学生論文集 2004年楽譜版 p.62-68.

## 【後記】

『会報』第14号をお届けします。今回より柏木・住谷両先生に代わり、編集を担当させていただくことになりました。今回は残念ながら書評・新刊紹介についての投稿はありませんでしたが、そのかわり昨年度中にフランスでの学会に参加された山本・粕谷両先生、およびパリ在住の羽成優さんのご協力を得て、コロック・セミナー報告のコーナーを充実させることができました。ご存知のようにインターネットやメールの発達によって、フランス本国でのスタンダール研究の現状などはほとんどリアルタイムで入るようになって参りましたが、実際の場の雰囲気や研究者の関心の全般的な傾向などは、二次的な媒体からは得ることのできない貴重な情報です。原稿をお寄せ頂いた方々に心より感謝いたします。

会員の皆様の情報交換の場、および会の活動の発信源として、さらに内容を充実させていきたいと考えておりますので、今後に向けて忌憚のないご意見をお寄せ下さい。懸案となっております研究会のホームページも、なんとか今年中に立ち上げたいと考えております。パソコンに詳しい皆様からのご提案をお待ちしております。

この数年、フランスではバルザック、アレクサンドル・デュマ、ユゴー、ジョルジュ・サンドの生誕200周年、ゾラの没後100周年など、19世紀文学者に関する記念行事が相次ぎました。今から20年ほど前、スタンダールの生誕200周年を祝って日仏両国で繰り広げられた盛大な記念行事を直接には知らない私共の世代にしてみれば、スタンダールとかのロマン派世代の作家たちの間に横たわる世代の差を、身をもって認識する機会でもありました。スタンダールの生きた時代がますます遠くなっていくこの時代に、歴史的な視点を保ちつつも、月並みな言い方ではありますが、時代を超えて生き続ける文学作品の普遍的な価値をすくいあげ、伝えていくことの意義について考える今日この頃です。

次号に向け、活発な投稿をお待ち申し上げます。

(杉本 記 cypresdujapon@mpd.biglobe.ne.jp)

スタンダール研究会事務局

〒657-0011

神戸市灘区鶴甲 1 - 2 - 1 神戸大学国際文化学部 岩本研究室  
(078-803-0804)